

親子ひろしま訪問団

中学生ながさき訪問団

平成30年度訪問の記録

広島：平成30年（2018年）8月5日～7日

長崎：平成30年（2018年）8月8日～10日



秦 野 市

～ 目 次 ～

は し が き	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.1
I 親子ひろしま訪問団	
1 訪問の概要	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.3
2 訪問団員（参加者）の声	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.14
3 団員名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.18
4 訪問団規約	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.19
II 中学生ながさき訪問団	
1 訪問の概要	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.20
2 訪問団員（参加者）の声	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.26
3 団員名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.31
III はだの平和の日のつどい	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.32
IV 資 料	
1 麩市民憲章、麩市平和都市宣言、平和の日制定文	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.33
2 広島市平和宣言	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.34
3 (広島)こども代表「平和への誓い」	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.36
4 長崎平和宣言	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.37
5 (長崎)被爆者代表「平和への誓い」	・・・・・・・・・・・・・・・・ P.40

◆訪問団の主なスケジュール

日 時	項 目	内 容
6月23日(土) ひろしま:午後1時半～ ながさき:午後3時半～	① 参加者説明会 ② 第1回研修会	① 日程等について ② 平和学習
7月24日(火) ① 午後1時半 ～3時15分 ② 午後3時半 ～4時	① 第2回研修会 ② 結団式 市長表敬訪問	「はだの平和の日のつどい」での 報告方法検討 市長メッセージ・千羽鶴の受け渡し 場所：秦野市役所本庁舎4階 議会第1会議室
8月5日(日) ～ 8月7日(火)	広島訪問	① 広島平和記念資料館見学 ② 原爆の子の像へ千羽鶴を拝納 ③ 平和記念式典参列 ④ 被爆体験聴講 ⑤ とうろう流し ⑥ 平和記念公園内碑めぐり ⑦ 宮島見学
8月8日(水) ～ 8月10日(金)	長崎訪問	① 長崎原爆資料館へ千羽鶴を拝納 ② 青少年ピースフォーラム ③ 被爆体験聴講 ④ 原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列 ⑤ 平和公園フィールドワーク ⑥ 長崎原爆資料館見学 ⑦ 歴史学習施設見学
8月12日(日) 午後4時20分 ～5時	はだの平和の日 のつどい	訪問の活動報告 場所：秦野市文化会館小ホール

はしがき

広島・長崎に原爆が投下され、多くの尊い命が奪われてから、70年を超える月日が経ちました。今でも原爆の後遺症や心の傷で苦しむ方がたくさんいる一方で、復興の努力の中、平和を訴えてきた戦争体験者は減少の一途をたどり、悲惨な記憶の風化が進行しつつあります。また、現代社会の中でも、いじめや虐待、殺人により尊い命が奪われるといった悲しい報道が毎日のように流れ、世界ではいまだ紛争が絶えず、私たちが希求する平和な社会と言える状況にはないように思われます。

戦後50年を契機に始まった「親子ひろしま訪問団」は、今年で24回目を迎えました。今年で、230名の親子が広島を訪問しました。

また、長崎市で平和首長会議総会が開催された昨年からは、市内在住中学生による「中学生ながさき訪問団」が長崎市を訪問し、今年で2回目となりました。

どちらの訪問団も、天候にも恵まれ、無事に行程を終えることができました。7年前のこの日、この二つの場所で、原爆が一瞬にして多くの人々の生活とその尊い命を奪ったことを思うと、言葉もありません。

戦争を起こしたのも人間、傷つき立ち上がって生きるのも人間。「人が人を傷つける」という出来事がたびたび報道されている昨今、両訪問団員の総勢12名にとって、平和記念資料館又は原爆資料館の見学、青少年ピースフォーラムへの参加、平和記念式典への参列、被爆体験談の聴講などの経験は、改めて平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

また、訪問終了後には、両訪問団がそれぞれの被爆地を訪問し、肌を通して学び、感じてきたことを広く市民へ継承していくため、8月12日に「はだの平和の日のつどい」を開催し、多くの観客が見守る中、両訪問団の活動報告を行いました。訪問団員の生の声が、会場の人々の心に届いたと思います。

本市では、核兵器廃絶、非核三原則の堅持、恒久平和を柱とした「平和都市宣言」を定め、また、広島及び長崎両市が主導する「日本非核宣言自治体協議会」や「平和首長会議」に加盟し、平和への思いを発信しています。

平成20年6月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊さを考える機会として、8月15日を「平和の日」と制定しました。毎年「平和の日」近辺の日程で、市民が主体となった様々な平和事業を展開しています。

また、平成21年8月には、市役所に「平和の灯モニュメント」を市内事業所の協

力を得て、自治体としては全国で14か所目、神奈川県内では初めて設置せっちしました。このモニュメントの種火たねびは、「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火さいかし持ち帰った炎ほのおを、「平和のシンボル」としてともし続けています。

今年、訪問団が広島及び長崎両市に届けた千羽鶴せんぼづるはおよそ2万3千羽にもなりました。一羽一羽、平和への思いを胸むねに丁寧ていねいに折っていただいた多くの市民みなさまの皆様みなさまに、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴せんぼづるの重さに、鶴つるを折られた皆様みなさまの思いを感じながら、心を込めて鶴つるを捧ささげました。

平和記念式典への参列ひばくや被爆体験談ひばくの聴講ちようこうなどの貴重な経験きちようを含め、被爆地ひばくの両市で見聞きし学んだことを、団員一人ひとりが心こころに刻み込み、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継ついでくれることを心より願います。

秦野市市民部市民活動支援課

I 親子ひろしま訪問団

1 訪問の概要

(1) 訪問1日目・8月5日(日)

8:08 小田原駅出発

11:41 広島着

14:30 広島平和記念公園見学

15:00 広島平和記念資料館見学



「原爆の子の像」の前で千羽鶴とともに

千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げる

原爆の子の像

この像のモデル佐々木禎子氏は、2歳の時に爆心地から1.7kmの自宅で被爆した。足が速く、とても元気な子だったが、小学6年生の時に原爆症を発症した。入院中、鶴を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けたが、中学校に入学できずに亡くなった。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられた。

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、この子どもたちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られた鐘を寄贈した。その鐘の下に金色の折り鶴がつるされ、風鈴式に音が出るようになっている。この鐘と金色の折り鶴は平成15年に複製されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されている。

訪問団は、広島到着後、市民から託された千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に捧げた。平和記念公園には世界中から大勢の人々が集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が捧げられていた。



平和な未来への夢を託す少女の像



同年代の禎子さんを思い、鐘を鳴らす

平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の繁華街だった。しかし、爆心地に近かったため、原爆投下により壊滅した。

その後、昭和29年(1954年)に平和を祈念し、建築家の丹下健三氏の手により公園として生まれ変わった。



式典前日の記念公園

園内には平和記念資料館をはじめ、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されている。

毎年、原爆が投下された8月6日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式(平和記念式典)」が開催され、夜には元安川をはじめ市内六つの川で犠牲者を慰霊する「とうろう流し」が行われている。

平成28年5月には、バラク・オバマ前大統領がアメリカ合衆国大統領として初めて訪れ、原爆死没者慰霊碑の前で、核兵器なき世界の実現へ向けた思いをスピーチした。

平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の実相を伝え、核兵器のない平和な世界の実現に貢献するために開設された。本館と東館の二つの建物からなり、昨年度から改修工事中の本館は見学することができませんでしたが、昨年リニューアルしたばかりの東館では、プロジェクションマッピングやタッチパネル等、最新技術を活用した資料を展示している。



プロジェクションマッピングを利用し、原爆投下前後を表現した展示

また、核実験への抗議文を展示しており、その数は600通以上、人類最初の被爆地として、強く、地道に訴えを発し続けている。

平成28年5月に資料館を訪れたオバマ前大統領は、東館1階ロビーで、同行した安倍晋三内閣総理大臣と共に核兵器廃絶に向けたメッセージを記した後、自らが折った鶴2羽を、子どもたちに手渡しました。その折り鶴は、テレビで見るのとは違い、静かに、そして強く、訪問団員の心に戦争や原爆の悲惨さを訴えかけた。

(2) 訪問2日目・8月6日(月)

- 8:00 原爆死没者慰霊式並びに
平和祈念式参列
- 10:00 被爆者体験談の聴講
- 13:30 平和記念公園内の碑めぐり
- 19:30 とうろう流し



それぞれの平和への思いを灯籠に込めた

原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年8月6日に、被爆者、政府、自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われる。

午前8時に開会し、松井一實広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿を原爆慰霊碑に納めた。

この1年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は5,393名。名簿搭載者の総数は31万4,118名に、名簿の数は115冊となった。



平和宣言をする松井広島市長



黙とうする団員たち

原爆が投下された午前8時15分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにしました。

黙とう後、松井一實広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信された。広島市は、平成10年(1998年)から

核兵器保有国の駐日大使の式典への参列を求める取組を開始し、今年は、85か国と欧州連合代表らが参列した。

松井市長は平和宣言で、核抑止や核の傘という考え方は、長期にわたる世界の安全を保障するには、極めて不安定で危険としたうえで、各国の為政者に対し、NPT(核不拡散条約)に義務づけられた核軍縮を誠実に履行し、核兵器禁止条約を核兵器のない世界への一里塚とするための取組を進めるよう訴えた。

訪問団は、初めて参列する式典の、テレビで見るとは異なる厳粛な雰囲気緊張しながら、参列する多くの被爆者及び遺族とともに黙とうを捧げた。子ども

私たちは、広島市長や安倍晋三内閣総理大臣の挨拶、同年代であることも代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いとこの貴重な経験を、心に刻んだ。

げんぱくしほつしゃいれいひ 原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の冢形埴輪に似たデザインの碑で、中央の石室には原爆死没者名簿が納められている。碑の正面には、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」という言葉が刻み込まれている。

この静かで短い言葉には、原爆死没者への哀悼と、戦争という過ちを二度と繰り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打つ。

原爆慰霊碑、祈りの泉、嵐の中の母子像、資料館、平和の灯は、一直線で結ばれるように設計されている。



直線上に原爆ドームが見える設計になっている

平和の灯

建立は、昭和39年(1964年)8月1日。当時、東京大学の教授だった丹下健三氏の設計により、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」や溶鉱炉などの全国の工場地帯から届けられた「産業の火」が、昭和20年(1945年)8月6日生まれの7名の女性により点火された。

建立の目的は「水を求めてやまなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核の象徴である。



本市にも分けられた平和の灯

本市では、平成21年8月6日に、平和の象徴として、市役所本庁舎玄関横に「平和の灯モニュメント」を設置したが、親子ひろしま訪問団がこの「平和の灯」から採火した火を持ち帰り、ともし続けている。

被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師の増岡清七氏から被爆体験のお話を伺った。増岡氏は、被爆当時の状況やその時の恐怖について子どもたちにも分かるよう丁寧に話し、その言葉は、戦争そして原爆の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く訴えかけた。

【被爆体験談（増岡清七氏のお話から抜粋）】

昭和20年(1945年)8月6日は、建物疎開作業のため、約8,300名の中学生が作業をしていた。学徒動員令により当時の中学生は、夏休みもなく工場等で作業や建物疎開に従事することになっていた。

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぎ、住民の避難場所のために建物を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁や市庁舎周辺は建物疎開で空き地となっていた。当日、増岡氏を含む3年生の半数の70名は、爆心地から約1kmの場所で、引率の先生の話聞いていた。


午前8時15分、突然、左からの風で押し上げられ、地面にたたきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ(光)ドン(音)・きのこ雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見回すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だか分からないほどの形相だった。皮膚が熱で剥がれ、爪のところで止まり、垂れ下がっていた。

増岡氏も左顔面や腕など皮膚が垂れ下がっていた。何が起こったのか、どこが安全なのかも分からないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくない」一心で逃げた。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じる事。広島市の

増岡清七氏 (広島市在住)



爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。
戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、反核・平和を訴え続けている。
現在、「広島県高等学校被爆教職員の手会」会長。

街が^{ほのお}炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた^{ぼうくうごう}防空壕には、人が重なり合い、あふれていた。

ひん死の状態、水や家族を求めていた。
^{こかげ}木陰でそのまま^{ねむ}眠ってしまったところを^{よくじつ}翌日、
救助隊の馬車で市外の民家の^{ざしき}座敷に運ばれた。
^{すで}既に多くの人が丸太のように横たわっていた。
この時、初めて^{きたな}汚い布で^{かんばん}患部を^ふ拭いたが、
^{ちりょう}治療はされなかった。



増岡氏の話に真剣な眼差しを向ける団員たち

^{よくじつ}翌日、^{きたな}汚い^{ちやわん}茶碗で^{かゆ}お粥が1杯置かれたが、^{ひふ}皮膚のうみで左目と口が開かず、食
べるのに困った。^{ひふ}皮膚が^た垂れ下がった左顔面や^{うで}腕に太陽の光が当たると、^{はり}針でチク
チク刺されるような痛みが続いた。数日後、行方を必死で^{さが}探してくれた父親と再会
し、^{にぐるま}荷車に乗せられ^{しんせき}親戚宅に行った。

その時は、^{ますおか}増岡氏の体を^{きづか}気遣って教えられなかったが、^{じたく}自宅は^{ぜんかい}全壊、^{そくし}母親は即死
していたと、後に父親から伝えられた。^{りょうよう}療養のための旅行で留守にして死を^{まぬか}免れた
父親も^{よくとし}翌年、^{ますおか}増岡氏が15歳のときに亡くなった。恐らく、^{おそ}増岡氏の行方を^{さが}探す
ために^{げんぱく}原爆投下直後の^{ひろしま}広島を歩いて回る中で、^{ざんりゅうほうしゃのう}残留放射能を浴びてしまった
ためと思われる（^{にゅうしひぱく}入市被爆）。^{かそう}火葬する設備がなく、自分自身で^{すで}だびに付した。既
に兄は^{とっこうたいいん}特攻隊員として^{おきなわ}沖縄で戦死しており、家族は姉と二人きりになってしまっ
た。

学友たちも多くが^{げんぱく}原爆により^な亡くなったが、そのうちの一人の^{いひん}遺品が、平和記念
資料館に^{てんじ}展示されている。

^{げんぱく}原爆ドーム

後に「^{げんぱく}原爆ドーム」と呼ばれるこの建物は、大正4年（1915年）に^{ひろしま}広島県
の物産品の^{はんぱいそくしん}販売促進を図る^{きよてん}拠点として建設され、建設当時は「^{ぶっさんちんれつかん}広島県物産陳列館」
という^{めいしやう}名称だった。その後、「^{さんぎやうしょうれいかん}広島県産業奨励館」と^{かいしやう}改称されたが、県内の
物産品の^{てんじ}展示・^{はんぱい}販売を行うほか、^{はげ}博物館、美術館としての^{やくわり}役割も担っていた。

しかし、戦争が^{はげ}激しくなった昭和19年（1944年）3月、^{さんぎやうしょうれいかん}産業奨励館と
しての業務が^{はいし}廃止され、^{ないむしやう}内務省中国・四国土木出張所や^{ひろしま}広島県地方材木・^{にっぽん}日本材
木^{とうせい}広島支社など^{とうせい}統制会社の事務所として使用されていた。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ造り、石材とモルタルで外装が施されていた。全体は3階建てで、正面中央部分に5階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームが乗っていた。

爆心地から約200mの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼した。爆風がほとんど垂直に働いたため、本館中心部は奇跡的に倒壊を逃れたものの、館内にいた全ての人々は即死している。



平和そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

鉄骨部分がむき出しの残骸と化し、いつからともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、平成8年(1996年)に世界遺産へ登録された。

静かにたたずむ原爆ドームの姿は、平和記念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問団に、同じような悲劇を繰り返してはいけないと改めて強く感じさせた。

平和記念公園内の碑めぐり

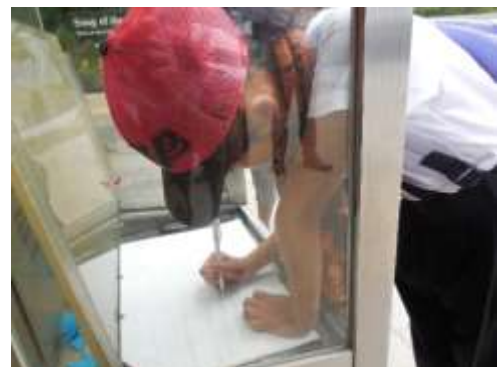
平和記念公園及びその周辺には、原爆犠牲者の慰霊碑など50を超える原爆関連の記念碑や記念建造物がある。訪問団員は猛暑の中、それらのいくつかをじっくり見学し、戦争や原爆の恐ろしさを実感した。

被爆したアオギリ

爆心地から約1.5キロ離れた東白島町にあった当時の広島通信局の中庭に、3本のアオギリの木が植えられていた。

原爆の投下によって、熱線と爆風をまともに受けた3本のアオギリは、枝葉が全て無くなり、爆心地側の幹の半分が焼け焦げた。

しかし、枯れ木同然だったアオギリは翌年の春、奇跡的に新芽を出し、その姿は、原爆投下と敗戦によって疲弊した人々の心に、生きる勇気と希望を与えた。



被爆アオギリの記載台に平和への思いを綴る団員



その姿で原爆の被害を訴え続けるアオギリ 育てられている。

昭和48年(1973年)、当時の中国郵政局(か
つての通信局)の建替えに伴い、平和記念公園内
の現在の場所に移植された。3本のうち1本は枯れ
てしまったが、この被爆したアオギリの種子は国内
外に贈られ、「被爆アオギリ2世」として大切に育
てられている。

峠三吉詩碑

峠三吉氏は、爆心地から約3キロ離れた自宅で被爆した。その体験を文学の活動を通して発表し、原爆反対、平和擁護の作品を数多く残した。その代表作である「原爆詩集」は、世界的な反響を与えた。

平和記念公園内の碑文には、次のような詩が刻まれている。

「ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ こどもをかえせ
わたしをかえせ
わたしにつながるにんげんをかえせ
にんげんの にんげんのよの
あるかぎり
くずれぬへいわを へいわをかえせ
峠 三吉」



峠三吉詩碑にもたくさんの千羽鶴が捧げられている

島病院

昭和8年(1933年)に開業。原爆投下により壊滅したが、昭和23年(1948年)に同所に再建された。

広島市への原爆投下における爆心地として、各時代の資料に「島病院」「島外科」と記載されるが、これらは全て現在の島外科内科に当たる。

昭和20年(1945年)8月6日に原爆リトルボーイが投下された際、病院の上空で大きく裂れたことが調査により判明したため、同所が爆心地とされている。



爆心地を眼前に思いを馳せる団員たち

げんばくくようとう 原爆供養塔

ばくしんち 爆心地に近いこの付近には、ひばく 被爆後、いたい 遺体がさんらん 散乱し、また、川から引き上げられたものなど、無数のいたい 遺体が運ばれ、だびに付された。

昭和21年（1946年）、市民からの寄付により、かりくようとう 仮供養塔、かりのうこつどう 仮納骨堂、れいはいどう 礼拝堂が建立され、その後、昭和30年

（1955年）に、広島市が中心となり、ろうきゆうか 老朽化したのうこつどう 納骨堂を改築し、各所にさんざい 散在していた引き取り手のないいこつ 遺骨もここに集めおさ 納めた。身内の見つからないいこつ 遺骨や氏名の判明しないいこつ 遺骨約7万柱がおさ 納められている。

毎年8月6日には、しゅうきょう 様々な宗教及びしゅうは 宗派合同のくよういれいさい 供養慰霊祭が営まれている。



犠牲となられた方々の供養塔を前に、手を合わせる団員たち

かんこくじんげんばくぎせいしゃいれいひ 韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約300万人のちょうせんじん 朝鮮人がおり、数万人が広島市内でひばく 被爆したといわれている。

「死者のれい 霊はかめ 亀のせ 背に乗ってしょうてん 昇天する」という故事にならって、かめ 亀をかたち 形どっただいざ 台座の上にひちゆう 碑柱が建ち、その上に二つのりゅう きざ 竜をきざ 刻んだかんむり 冠が乗せられている。



多くの花が手向けられた慰霊碑

碑は、当初、軍人であったちょうせん 朝鮮王家の一族りでんか 李殿下が司令部へのしゅつきんとちゆう 出勤途中にげんばく 原爆投下にあ 遭い、その後発見された場所付近ということから、ほんかわばしにしづ 本川橋西詰めに建立された。

その後、各方面からの強い要望により、平成11年（1999年）7月に平和記念公園内にいれいひ 慰霊碑の石は、国に帰れなかった人々への思いから、ふるさとかんこく 韓国の石が使われている。

平和の鐘

核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとして建立された。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一人ひとりの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになっている。

鐘は、梵鐘の分野で重要無形文化財保持者（人間国宝）である香取正彦氏が制作し、表面には「世界は一つ」を象徴する国境の無い世界地図が浮き彫りにされている。

撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原子力のマークがデザインされており、鐘楼の周囲の池には大賀ハスが植えられている。

被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、やけどの痛みをしのいだという被爆者の霊を慰めたものである。



平和への思いを込め、鐘を突く団員たち

とうろう流し

原爆は一瞬にして多くの命を奪った。そして、即死を免れてもひどいやけどを負った人たちが大勢いた。その人たちの多くは、その熱さと痛みに耐えかねて近くの川に次々に身を投げ、川面には遺体が浮き、川底にも遺体が沈んでいたという。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中心部にバラック建ての商店が建ち始めた昭和23～4年頃、親族や知人を原爆で失った遺族や市民たちが追善と供養のため、手作りの灯籠を川に流したのが、「とうろう流し」の始まりと言われている。

灯籠には、亡くなった方の名前と流した人の名前を書き込むのが一般的だが、最近では「平和への思い」が書かれる光景も目立つ。長い歴史を持つ「とうろう流し」は、慰霊とピースメッセージの両方の意味を持つようになった。毎年8月6日の夕刻から元安橋の上流から流される。

広島訪問2日目を終えた訪問団6名は、平和施設見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和への思いを込めて、灯籠を流した。



元安川を彩る灯籠

(3) 訪問3日目・8月7日(火)

- 9:53 広島駅発
- 10:30 世界遺産「いつくしまじんじゃ厳島神社」見学
- 16:57 広島駅発
- 20:35 小田原駅着・解散



世界遺産・宮島「厳島神社」を見学



2 訪問団員（参加者）の声

(1) 訪問前の感想

ア 親の声

●1945年8月6日広島、8月9日長崎に原爆が投下され、8月15日に終戦しました。これは、歴史の授業で覚えていることです。

戦争の悲惨さ、原爆がどのようなものだったのかは、これだけではわかりません。戦争は、人一人ひとりの命、人生を軽視したものです。

二度と戦争を起こさないためには、歴史の授業の一節ではでは足りません。戦争の記憶を忘れないよう、広島や長崎など自分の目で見て「考える」ことが重要だと思います。

●秦野生まれ、秦野育ちですが、今回初めて秦野市の平和啓発事業を知りました。最初は戸惑いました。戦争や原爆は4年生の子どもには理解できる内容ではないと思ったからです。しかし、毎年テレビで見ている平和記念式典への参列は、一生に一度あるかないかの出来事で、個人での参列はまずあり得ないと思ったことが、参加の決め手になりました。

親子ともに初めての広島になります。教科書での知識しかない私とまだほとんど無知の子ども。今からどうなるのか不安もありますが、しっかり自分の目で見て、戦争と平和を学びに行きたいと思います。

●娘にとって「広島＝広島東洋カープ」という印象が、少しでも平和を考える都市であることを知ってほしくて参加しました。被爆体験談聴講は楽しみにしています。

イ 子どもの声

●広島がどんな様子だったのか知りたいので参加しました。戦争で何人の人が犠牲ぎせいになったのか知りたいです。戦争がどんなものなのか、本だけでなく、直に感じてみたいと思っています。

●親子ひろしま訪問団ほうもんだんに参加しようと思ったきっかけは、秦野育ちでまだ4年生なので、原爆や戦争で嫌いやな思いをした方がいたと思うと、かわいそうだと感じ、そのことをしっかり学びたいと思ったからです。

●広島に行って、原爆で亡なくなった人の人数や、なんで落とされたのかを知りたいと思います。

(2) 訪問後の感想

ア 保護者の声

●「百聞は一見にしかず」でした。広島とはどういう場所か、平和記念式典におおぜいの出席者がいたこと、式典の最中の周辺の動き、投下目標地と実際の爆心地、原爆ドームの大きさ、テレビやインターネットでは、映像は切り取った画面で、360° 見ることはできません。その時の空気、暑さも感じることはできません。

実際その場に立つことでしか感じるできない貴重な体験を子どもとすることができました。

原爆被爆者の平均年齢が高くなっている中、体験談を聞くことも難しくなっていると感じました。

●毎年テレビで見ている平和記念式典に今回初めて参列しました。戦争、原爆の恐ろしさを広島での滞在を通して改めて感じ、人間が二度と繰り返してはならないことであると思いました。被爆者の増岡さんのお話を伺えたのは大変貴重な体験で、「平和とは、戦争とは真逆のこと。周りの人を認め、尊重して生きていく。人を傷付けることはしてはならない。人を殺すための兵器を作ってはいけない。」という増岡さんの言葉が心に残っています。

広島での3日間は、親子で戦争について学び、考える良い機会になりました。この活動が平和につながる第一歩になればいいと思います。

●学校で今回の案内のチラシをいただいて、「ママ、行ってみたい」と娘から言われ、多少不安はあるけれど、小学4年生なりに戦争、原爆、平和を考える良いきっかけになればと思い参加しました。

以前は、テレビで北朝鮮のニュースを見て、「原爆落としちゃえばいいじゃん」と言っていましたが、資料館を見たあと、「なんで戦争になったのだろう。なんで原爆を落としたのだろう。戦争は絶対してはいけない」と、白黒の写真でも大火傷をして顔がつぶれている人、皮膚が剥けている人、黒こげの遺体の写真を、目を背けずにしっかり見ていたので、娘の成長を感じましたし、思い切って参加して本当に良かったと思っています。

毎年8月になると、原爆、戦争のニュースを見るが多くなります。その度に、

今回の訪問団のことを思い出し、戦争や平和を想ってくれたらと思いました。本人の希望があれば、中学生ながさき訪問団にも参加させたいと思っています。

イ 子どもの声

●原子爆弾をどこに落としたかなどのが分かって、色々な^{けいけん}経験ができて良かったなと思いました。僕は広島へ行ったので、次は、中学生になって、中学生ながさき訪問団に参加したいと思いました。

●私は、親子ひろしま訪問団に参加して、被爆者^{ひばくしゃ}の人たちが火傷^{やけど}で負った傷^{きず}で目が見えなくなってしまうたり、自由に動かすところがない中、必死^にで逃げる^{すがた}姿を思うとかわいそうで^{おそ}恐ろしくなりました。戦争を二度と起こさないでほしい。全世界が戦争をしないで平和になってほしいと思います。宮島では、大鳥居^{おおとりい}に下まで行きました。手焼きもみじまんじゅう体験が楽しかったです。このメンバーで広島へ行けて良かったです。

●もう一回宮島へ行って、もみじまんじゅう体験をもう一度やりたいです。

3 団員名簿 めいぼ

保護者 氏名	子ども 氏名	役 割
さかの かずよし 坂野 一良	さかの ともや 坂野 智哉 西小5年	団 長
さいとう ゆき 齊藤 由紀	さいとう かなみ 齊藤 叶望 南小4年	副団長
くさやま ちえこ 草山 智栄子	くさやま ちか 草山 千佳 南小4年	記 録

4 訪問団規約

(名称)

第1条 この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

(目的)

第2条 訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

(事業)

第3条 訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。
- (2) 平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。
- (3) 原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を被りながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。
- (4) その他目的を達成するために必要な事業。

(組織)

第4条 訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子5組10人により組織する。

- 2 訪問団に、団長、副団長、記録、会計及び監事を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。
- 3 団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。
- 4 副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。
- 5 記録は、訪問団の事業を記録するものとする。
- 6 会計は、訪問団の経理を処理するものとする。
- 7 監事は、会計を監査するものとする。
- 8 訪問団の事務局は、秦野市役所平和主管課に置く。

(解散)

第5条 訪問団は、第2条の目的を達成したときに解散するものとする。

(経費)

第6条 訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

(その他)

第7条 この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附 則

この規約は、平成7年6月15日から施行する。

この規約は、平成28年4月1日から施行する。

この規約は、平成29年4月1日から施行する。

Ⅱ 中学生ながさき訪問団

1 訪問の概要

(1) 訪問1日目・8月8日(水)

- 5 : 3 0 秦野市役所出発
- 8 : 1 5 羽田空港出発
- 1 0 : 0 5 長崎空港出発
- 1 3 : 5 0 「原爆殉難教え子と教師の像」に千羽鶴を拝納
- 1 4 : 0 0 青少年ピースフォーラム開会行事
- 1 5 : 2 5 平和学習フィールドワーク
- 1 8 : 0 0 青少年ピースフォーラム交流会



「原爆殉難教え子と教師の像」前で千羽鶴とともに

青少年ピースフォーラム

8月9日の平和祈念式典に併せて、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として、長崎市の主催により平成5年から毎年開催されています。

フォーラムの開催に当たっては、長崎市の高校生及び大学生によるピースボランティアが中心となり、企画から運営まで行います。

26回目を迎えた平成30年度は、全国から35団体、464名が参加し、参加者数は累計で約9,000名となりました。

【14:00~】開会行事(平和会館ホール)

- ①開会宣言
- ②挨拶
- ③被爆体験講話

【被爆体験講話講師】深堀讓治氏



当時4歳8ヶ月、爆心地より1.5kmの自宅近くの畑で被爆、両手、両足、腹を火傷し足は3回手術を受ける。

「戦争や原爆の恐ろしさを次の世代に伝えていくことが被爆者の役目」と現在語り部として活動している。

(公財)長崎平和推進協会ホームページより

【15：25～】^{ひばく}被爆建造物等フィールドワーク（平和公園コース）

^{げんばく}原爆落下中心地碑

昭和20年（1945年）8月9日11時2分。アメリカのB29爆撃機から投下された原爆は松山町171番地の上空500mでさく裂しました。終戦直後、その地に原爆災害調査団が標柱（アスベスト柱）を建立し、その後矢印型、木製、蛇紋岩の三角柱と姿を変え、現在では落下中心地標柱として昭和43年（1968年）に建立された黒御影石の碑が立てられています。



歴史を伝え続ける中心地碑

^{うらがみてんしゅうどういへき}浦上天主堂遺壁

爆心地から北東へ約500mの小高い丘にあった浦上天主堂は、明治28年（1895年）から建築に着手し、信徒たちの献金と労働奉仕により、大正3年（1914年）に献堂式を挙げるにいたりました。大正14年（1925年）に正面の双塔が完成し、大小の鐘が吊されました。

東洋一の壮大さを誇った天主堂でしたが、昭和20年（1945年）8月9日、午前11時2分、原爆のさく裂により破壊され、わずかにまわりの壁を残すのみとなりました。この側壁は聖堂の南側の一部で、昭和33年（1958年）に新しい天主堂建設のためこの地に移築されたものであり、壁上の石像はザベリオと使徒です。しかし、風雨にさらされて傷みが進んだため、安全性を考慮して現在の形状のまま内部及び表面を補強しました。



当時の惨劇を物語る

^{ひばく}被爆当時の地層

原爆落下中心地に当たるこの地層には、原爆によって破壊された家屋の瓦やレンガ、熱によって焼けた土や溶けたガラスなどが現在でも大量に埋没しており、被爆当時の悲惨な状況を示す被爆資料として、現地に保存、展示されています。



参加者も地層に刻まれた過去を目に焼き付ける

いずみ 平和の泉

原爆のため体内まで焼けただれた被爆者たちは「水を、水を」とうめき叫びながら死んでいきました。その痛ましい霊に水を捧げて、冥福を祈り、世界恒久平和と核兵器廃絶の願いを込めて浄財を募り建設された円形の泉で、平和公園の一角、平和祈念像の前方にあります。直径18メートルで昭和44年に完成しました。

平和の鳩と鶴の羽根を象徴した噴水が舞い、正面には、被爆し、水を求めてさまよった少女の手記「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」が刻まれています。

「のどが渴いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
どうとうあぶらの浮いたまま飲みました
—あの日のある少女の手記から—



水を求める当時の人の苦しさを伝える

きねん 平和祈念像

昭和30年（1955年）8月8日に建てられました。青銅製の像で高さ9.8m、台座3.8m、重量約22トン。北村西望氏による作品です。

この像は神の愛と仏の慈悲を象徴し、原爆犠牲者の鎮魂と永遠の平和を願い、天を指す右手は「原爆の脅威（長崎の過去）」を、水平にのばした左手は「平和（長崎の未来）」を示し、軽く閉じた瞼は戦争犠牲者の冥福を祈っています。

毎年8月9日、「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」がここで催され、全世界に向けて「長崎平和宣言」がなされます。

【18:00~】交流会（長崎新聞文化ホール）

ピースボランティア、他の自治体の青少年と、立食パーティーで交流しました。



平和公園のシンボルとしてそびえ立つ



様々な自治体の青少年と交流

(2) 訪問2日目・8月9日(木)

- 10:35 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典
(長崎原爆資料館)
- 13:30 青少年ピースフォーラム意見交換会
(長崎ブリックホール)
- 15:40 原爆資料館見学



式典会場で記念写真

ながさきげんぱくぎせいしゃいれいへいわきねんしきてん 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

毎年8月9日に、被爆者、政府・自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われます。

当日は非常によく晴れ、猛暑の中の式典参列となりました。

午前10時35分に開会し、被爆者による合唱、原爆死没者名簿の奉安が行われました。名簿登載者数



原爆死没者名簿が納められた

は、平成30年8月9日現在で、179,226名となりました。

73年前のこの日、原爆が投下された午前11時2分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにしました。

黙とう後、田上富久長崎市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「長崎平和宣言」が発信された。田上市長は平和宣言で、音楽やスポーツを通して平和を表現することができる市民社会こそ平和を生む基盤だとし、「戦争の文化」ではなく「平和の文化」を、市民社会の力で世界中に広げる呼びかけをしました。

田上市長による「平和宣言」の後は、被爆者代表田中熙巳氏による「平和への誓い」が読み上げられました。田中氏は、自らの被爆体験に沿い、多くの被爆者の働きを偲びつつ、速やかに「核兵器禁止条約」を発効させ、核兵器も戦争もない世界の実現に尽力することを誓いました。

来賓の挨拶では、国際連合事務総長のアントニオ・グテーレス氏が登壇し、核兵器の完全廃絶及び平和な世界の実現について演説されました。

訪問団は、初めて参列する式典の、厳粛な中、これらの言葉をしっかりと受け止め、平和の重みを各々の心に深く刻んだようでした。

青少年ピースフォーラム意見交換会（長崎ブリックホール）

【13:30～】レクリエーション

「みんなと友達になろう！」をテーマに、事前に割り振られていた班の仲間たちとのアイスブレイクを行いました。



班ごとに交流する参加者たち

【13:45～】平和な世界にするために、何ができるか考えよう

①あなたが幸せだと感じる時、ことは？

参加者各々が幸せを感じるシチュエーションをブレインストーミング形式で出しました。

②73年前の過去を想像する、そして・・・

73年前、参加者が被爆地にいたら、どのように傷付くかということ、一人ひとりの想像力を膨らませ、話し合いました。



全国の自治体の青少年との話し合いで交流を深めた

③平和な世界にするために！

平和な世界にするためにどのようなことができるか、参加者それぞれが知恵を絞ってアイデアを出しました。

④今、私たちにできること

③の話し合いを受け、今の参加者自身が実践できることについて話し合いました。

【14:55～】2日間で学んだことを伝えよう

青少年ピースフォーラム二日間の活動を通して、感じ、学んだことを踏まえ、周囲の人に伝えたいことや将来の夢を書き、参加者それぞれが短冊に書き込み、モザイクアートを作成しました。



モザイクアートの前で集合写真

【15:25～】閉会式、修了証授与

ながさきげんぱくしりょうかん
長崎原爆資料館

この資料館では被爆の惨状をはじめ原爆が投下されるに至った経過、被爆から現在までの長崎の復興の様子、核兵器開発の歴史、そして核兵器のない平和希求までがストーリーを持たせ分かりやすく展示されています。

原爆直後と現在の長崎の風景写真を比較すると、目覚ましい勢いで復興した長崎の街と、長崎市民のたくましが伝わってきます。

今回の見学では、常駐している平和案内人の方に館内を案内してもらい、展示物の説明を受けました。



原爆資料館前にて

(3) 訪問3日目・8月10日(金)

- 8:50 出島見学
- 10:00 大浦天主堂見学
- 10:35 グラバー園見学
- 15:25 長崎空港出発
- 17:50 羽田空港出発
- 21:00 秦野市役所到着、解散



三日間の行程を終え、たくましくなった様子で帰ってきた訪問団



2 訪問団員（参加者）の声

(1) 訪問前の感想

●中学生ながさき訪問団に参加しようと思った理由は、去年親子ひろしま訪問団として広島をおとず訪れ原爆について興味を持ち、そして、広島と同様に被爆地である長崎もどのような悲惨な出来事があったのかを知りたかったからです。そして、私が長崎に行ったら見たいものは、原爆資料館や世界遺産に登録された大浦天主堂などです。そこで私は、当時キリスト教が禁止されている中で、隠れて信仰していた「隠れキリシタン」の人たちがどのような生活をしていたのかを知りたいです。そして、私たちが3日間で学んだことを、8月12日の発表で沢山伝えたいです。

●秦野と違うところを見に行ってみたかったので、応募しました。長崎の人たちにとって原爆はどのようなもので、どれだけ長崎の人々の命を奪ったのか。それを知って、将来少しでも役に立てば良いと思っています。

●戦争の悲惨さ、長崎の歴史を知りたいです。

●テレビや教科書だけでは分からないことも多いので、現地に行き行って戦争のことについて学ぶことが多いと思い、申し込みました。被爆者の方々が高齢化していて、伝えていく人が少なくなっていると聞きました。他校の先輩方と一緒に戦争について、「平和とは何か」ということについて、考えてみたいと思います。

●「夏休みどこに行くか」という何気ない家庭の会話の中で、母に勧められ、申し込みました。長崎に行ったら、出島を見てみたいと思っています。平和祈念式典は毎年テレビで見っていたので、一度参列してみたいと思っていました。

●私は、去年ピースキャンドルナイトにイベントサポーターとして参加した時に、この「中学生ながさき訪問団」の報告を聞きました。そこでは、実際に戦争に遭った方の話を聞いたり、自分たちが質問したりして、その場で戦争や平和について学ぶことができたり、青少年ピースフォーラムでは、全国から集まった団体の人たちと話し合いながら仲を深めることができるといった経験を、私たち観客に話してくれました。私は、その報告を聞いて、来年は自分が長崎へ行って色々なことを見て、

聞いて、確かめて、学びたいと思い、今年参加することを決めました。長崎へ行ったら、戦争の恐ろしさを聞いたり、原爆資料館などを見て改めて知ることができると思うので、そこで感じた思い、考えなどを、今度は自分たちがはだの平和の日のつどいに来てくれた観客の人たちに、しっかり伝えることができれば良いと思います。そして、長崎へ行ったら、戦争、平和について学ぶだけではなく、秦野市から参加した中学生、青少年ピースフォーラムに参加する人たちと、一生に一度の思い出を作って帰りたいと思います。

(2) 訪問後の感想

●長崎を訪れる前の私は、長崎に投下された原子爆弾や被害についてよく知りませんでした。実際に青少年ピースフォーラムで聞いた被爆体験者のお話や平和祈念式典に参列して、平和の大切さ、原子爆弾の恐ろしさ、何一つ不自由なく生活できていることのありがたさを学びました。そして、私が初めて長崎に行き、感じたことが、広島へいわきねんしりょうかんの平和記念資料館と長崎げんぱくしりょうかんの原爆資料館の差です。広島へいわきねんしりょうかんの平和記念資料館は写真が多かったのですが、長崎げんぱくしりょうかんは実際に被爆した給水塔などの実物が見ることができて、原子爆弾の恐ろしさを改めて実感することができました。そして、初めて知ったことが三つあります。一つ目は、平和祈念像のポーズについて、左手が「平和」、右手が「原爆の恐ろしさ」、閉じた目が「戦争で亡くなった方々への冥福」を祈って造られたということです。二つ目は、平和公園内にある噴水は、羽ばたく白い鳩をイメージしていることです。三つ目は、各国から贈られたモニュメントは、世界平和のシンボルとなっていることです。そして、この訪問の中で、一番印象に残っていることは、被爆体験者の小峰秀孝さんのお話です。小峰さんのお父さんは、お医者さんに「この子は体の半分を火傷している。帰ってくれ。」と言われ、医薬品もなかったにも関わらず、小峰さんが助かった理由は「家族の愛情のおかげ」と小峰さんはおっしゃっていました。やはり、家族の愛情は大切なのだと思いました。

最後に、私が学んだことを踏まえて、今後取り組んでいきたいことが二つあります。一つ目は、被爆体験者の話を聞けるのは、私たちが最後の世代で、被爆者の平均年齢は82歳を超えたため、私たちの後の世代では生の話を聞くことが難しくなっていると青少年ピースフォーラムで言われ、私たちの世代が聞いたことを後の世

代に伝承^{でんしょう}していくことです。二つ目は、被爆地^{ひばくち}を両方^{おとず}訪れた者として、原爆について考えるピースフォーラムのボランティアに参加することです。このフォーラムでは、「ピースボランティア」と呼ばれる地元^よの高校生や大学生で結成された団体^{だんたい}であり、平和学習のお手伝いをするという仕事があり、私もこれに参加したいと強く思いました。

●訪問に参加してから、今自分たちがどれだけ幸せな時間を送ることができているか改めて気付かせてもらうことができました。一緒に訪問^{いっしょ}してくださった先生たちには、3日もの間、色々なことを教えてもらったり、私が何かを希望した時には、応^{こた}えてくれたり、本当に色々な手助けをしてもらいました。

訪問に参加して、他県の子と仲良くなれたり、他の人の平和についての考え方を知れて良かったと思います。自分では気付かなかったことも、他人の意見を聞けることで、「ああ、こんな考えもあるのだな」と気付くことができ、すごくいい経験^{けいけん}ができ、良かったと思います。

●戦争が悲惨^{ひさん}なことは分かっていたはいましたが、原爆資料館^{げんぱくしりょうかん}などで、実際^{じっさい}体験した人の話などを聞くと、悲惨^{ひさん}さをもっと理解^{りかい}することができました。原子爆弾の強大さと原子爆弾一つでどれだけの死傷者^{ししょうしゃ}が出るのか知ることができ、人間の酷^{ひど}さも知ることができました。残酷^{ざんこく}な面もありましたが、この現実^{げんじつ}を受け止めて、ここから平和に過^すごすためにはどうしたらよいか、ということなどについて考えることができ、良かったです。

●今回、初めて原爆について考えました。毎年、広島や長崎のことはテレビで特集が組まれています、「そうだったんだ」や「かわいそうだな」くらいにしか感じませんでした。いざ現地^{げんち}へ行ってみると、今まで軽い気持ちで考えていた戦争がとても大変だったことに気付かされました。青少年ピースフォーラム1日目の被爆体験^{ひばくたいけん}講和^{こうわ}を聞いて、真剣^{しんけん}に考えなければいけないことだったと思いました。平和祈念像^{へいわきねんぞう}や平和の泉^{いずみ}を見学したとき、当時「当たり前」が「当たり前じゃない」に変わってしまったのだと思いました。

軽い気持ちで参加した訪問団でしたが、8月8日、現地^{げんち}に行って青少年ピースフ

オーラムに参加した時から、戦争の悲惨^{ひさん}さや平和の大切さを学ぶことができました。

参加後、私の中の戦争への考え方が大きく変化しました。命の尊^{とうと}さや核兵器^{かくへいき}の恐^{こわ}さを知り、平和であることがどれだけ大切なのかを思い知らされました。

今回の経験^{けいけん}を大切に、この先世界から早く核兵器^{かくへいき}がなくなるように祈^{いの}りたいです。

●ほとんど飛行機に乗って見たかったという気持ちだけで参加しましたが、訪問してみると、楽しくて、戦争について知らないことも沢^{たくさん}山学ぶことができ、長崎の美味しい食べ物^{たくさん}も沢^{たくさん}山食べることができて良かったです。

青少年ピースフォーラムでは、ピースボランティアの方々も、同じ班^{はん}になった人たちもすごくフレンドリーで、仲良くなれました。他県の方言も沢^{たくさん}山聞くことができ、良^いかったです。今回一^{いっしょ}緒に長崎へ訪問した団員も、初めて会った人たちでしたが、2回目にあつた時には仲良くなることができました。想像^{そうぞう}以上に楽しかったので、また参加してみたいと思いました。

●私は、初めて長崎へ行って、長崎でかつて起きた歴史について色々と学びました。

2日間で行われた青少年ピースフォーラム1日目、私たちは最初に染谷西郷さんが作詞作曲^{さくしきさきよく}をした「こどもたちのそら」という歌^{うた}を聴^ききました。この歌では、染谷さんの原爆に対する思いが込められていて、今がとても幸せだということを思い知らされました。被爆体験^{ひばくたいけん}講和^{こうわ}では、実際^{じっさい}に原爆を体験した小峰秀孝さんから話を聞いて、戦争^{おそ}の恐ろしさと、今後二度と戦争は起きてはいけないということを改めて感じました。そして、原爆体験者が少なくなっている今、私たちが小峰さんから聞いたことを、次の世代へ伝えたいです。その後は、平和公園^{たいんさく}を探索しました。ここでは、今まで知らなかった長崎^{たくさん}についてのことを沢^{たくさん}山知ることができました。夜は、班^{はん}に分かれて交流会を行い、色々な場所から来た青少年たちと話すことができました。

2日目は、平和祈念式典^{ふたた}に参列した後、再び青少年ピースフォーラムに参加しました。この日は、グループごとに話し合いをし、「みんなが幸せと思う時」「戦争が起きないためにはどうすればよいか」など、一つの問いに、みんなが沢^{たくさん}山の意見を出して、戦争について深く考えることができました。

3日目は、出島、グラバー園、大浦天主堂^{おおうらてんしゅどう}へ行き、長崎^{たんのう}を堪能しました。

中学最後の夏休み、長崎で戦争の悲惨^{ひさん}さ、平和の尊^{とうと}さをしっかり学ぶことができました。この3日間で、大切なこと^{たくさん}を沢山知り、「中学生ながさき訪問団」に参加して、自分が成長できたと思うので、とても良い機会になりました。そして、平和、戦争について「学ぶ」だけでなく、青少年ピースフォーラムを通して、同じ班^{はん}の人、一緒に参加した訪問団の人たちと仲も深まり、充実^すして過ごすことができました。あっという間で、思い出に残る3日間。ここでの経験^{けいけん}を忘れず^{わす}に、これからの人生に進んでいきたいと思えます。

3 団員名簿 めいぼ

No.	氏名	所属	学年
1	<small>いなば</small> 稲葉 <small>ねお</small> 音緒	鶴巻中学校	3
2	<small>まるやま</small> 丸山 <small>なのは</small> なのは	本町中学校	2
3	<small>おおかわ</small> 大川 <small>くれは</small> 紅葉	本町中学校	2
4	<small>くぼてら</small> 久保寺 <small>みく</small> 美空	本町中学校	2
5	<small>きたやま</small> 北山 <small>りん</small> 凜	東中学校	1
6	<small>しぶや</small> 渋谷 <small>みさき</small> 美咲希	渋谷中学校	2

Ⅲ はだの平和の日のつどい

訪問を終え、秦野の地へ帰った両訪問団は、8月12日（日）に秦野市文化会館小ホールにて「平和の日事業」として開催された「はだの平和の日のつどい」で、来場した100名を超える観客を前に訪問の活動報告を行いました。彼らの肌を通して感じ、学んできたことを語った生の声は、会場の市民の心にも深く刻まれました。

なお、今年度の「はだの平和のつどい」では、公募市民5団体によるコンサートも行われました。



【15：30～】開 会

ピースキャンドルナイト実行委員会の森田委員長の挨拶により開会しました。



【15：35～】コンサート

平和への思いを込め、2団体が音楽の疲労をしました。



【16：20～】親子ひろしま訪問団活動報告

訪問時の写真を使ったスライドに合わせ、団員5名が分担して報告しました。



【16：40～】中学生ながさき訪問団活動報告

6名を二つのグループに分け、グループごとに発表。タブレット端末を操作しながら、団員が自分たちで写真や動画を組み合わせ、作ったスライドを活用して報告しました。



【18：30～】コンサート

平和への思いを込め、3団体が音楽の疲労をしました。



IV 資 料

1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限りない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

- 1 平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。
- 1 きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。
- 1 健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。
- 1 市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。
- 1 みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和44年10月1日に制定したものです。

◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限りない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和61年3月27日制定

◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日 毎年8月15日

平成20年6月9日制定

2 広島市平和宣言

73年前、今日と同じ月曜日の朝。広島には真夏の太陽が照りつけ、いつも通りの一日が始まろうとしていました。皆さん、あなたや大切な家族がそこにいたらと想像しながら聞いてください。8時15分、目もくらむ一瞬の閃光。摂氏100万度を超える火の球からの強烈な放射線と熱線、そして猛烈な爆風。立ち昇ったきこの雲の下で何の罪もない多くの命が奪われ、街は破壊し尽くされました。「熱いよう！痛いよう！」潰れた家の下から母親に助けを求め叫ぶ子どもの声。「水を、水を下さい！」息絶え絶えの呻き声、唸り声。人が焦げる臭気の中、赤い肉をむき出しにして亡霊のごとくさまよう人々。随所で降った黒い雨。脳裏に焼きついた地獄絵図と放射線障害は、生き延びた被爆者の心身を蝕み続け、今なお苦悩の根源となっています。

世界にまだ1万4千発を超える核兵器がある中、意図的であれ偶発的であれ、核兵器が炸裂したあの日の広島の姿を再現させ、人々を苦難に陥れる可能性が高まっています。

被爆者の訴えは、核兵器の恐ろしさを熟知し、それを手にしたいという誘惑を断ち切るための警鐘です。年々被爆者の数が減少する中、その声に耳を傾けることが一層重要になっています。20歳だった被爆者は「核兵器が使われたなら、生あるもの全て死滅し、美しい地球は廃墟と化すでしょう。世界の指導者は被爆地に集い、その惨状に触れ、核兵器廃絶に向かう道筋だけでもつけてもらいたい。核廃絶ができるような万物の霊長たる人間であってほしい。」と訴え、命を大切に、地球の破局を避けるため、為政者に対し「理性」と洞察力を持って核兵器廃絶に向かうよう求めています。

昨年、核兵器禁止条約の成立に貢献したICANがノーベル平和賞を受賞し、被爆者の思いが世界に広まりつつあります。その一方で、今世界では自国第一主義が台頭し、核兵器の近代化が進められるなど、各国間に東西冷戦期の緊張関係が再現しかねない状況にあります。

同じく20歳だった別の被爆者は訴えます。「あのような惨事が二度と世界に起こらないことを願う。過去の事だとして忘却や風化させてしまうことがあっては絶対にならない。人類の英知を傾けることで地球が平和に満ちた場所となることを切に願う。」人類は歴史を忘れ、あるいは直視することを止めたとき、再び重大な過ちを犯してし

まいります。だからこそ私たちは「ヒロシマ」を「^{けいぞく}継続」して語り伝えなければなりません。核兵器の^{はいぜつ}廃絶に向けた取組が、各国の^{いせい}為政者の「^{りせい}理性」に基づく^{もと}行動によって「^{けいぞく}継続」するようにしなければなりません。

核^{よくし}抑止や核の^{かさ}傘という考え方は、核兵器の^{はかいりよく}破壊力を^{こじ}誇示し、相手国に^{きょうふ}恐怖を^{あた}与えることによって世界の^{ちつじょ}秩序を^{いじ}維持しようとするものであり、^{ほしょう}長期にわたる世界の安全を^{きげん}保障するには、^{いせいしゃ}極めて不安定で^{きざ}危険極まりないものです。為政者は、このことを心に^{きざ}刻んだ上で、NPT(核不^{かくふかくさんじょうやく}拡散条約)に^{ぎむ}義務づけられた核^{ぐんしゆく}軍縮を^{せいじつ}誠実に^{りこう}履行し、さらに、核兵器^{かくへいき}禁止条約を核兵器のない世界への^{いちりづか}一里塚とするための取組を進めていただきたい。

私たち市民社会は、^{ちょうせんほんとう}朝鮮半島の^{きんちょうかんわ}緊張緩和が今後も^{へいわり}対話によって^{へいわり}平和裏に進むことを心から^{いせいしゃ}希望しています。為政者が^{いせいしゃ}勇気を持って行動するために、市民社会は^{たようせい}多様性を^{そんちょう}尊重しながら^{たが}互いに^{しんらい}信頼関係を^{じょうせい}醸成し、核兵器の^{はいぜつ}廃絶を人類共通の^{かちかん}価値観にしていかなければなりません。世界の7,600を超える都市で^こ構成する^{こうせい}平和首長会議は、そのための^{かんきょう}環境づくりに力を注ぎます。

日本政府には、核兵器^{かくへいききんしじょうやく}禁止条約の^{はっこう}発効に向けた流れの中で、日本国憲法が^{けんぼう}掲げる^{かか}崇高な^{けんぼう}平和主義を^{しゅぎ}体現するためにも、^{こくさい}国際社会が核兵器のない世界の^{じつげん}実現に向けた^{じつげん}対話と^{やくわり}協調を進めるよう、その^{やくわり}役割を果たしていただきたい。また、^{へいきんねんれい}平均年齢が82歳を超えた^{ひばくしゃ}被爆者をはじめ、^{ほうしやせん}放射線の^{えいきょう}影響により^{かか}心身に^{くのう}苦しみを抱える多くの^{くのう}人々の^{くのう}苦悩に^よ寄り添い、その^{しえんさく}支援策を^{じゅうじつ}充実するとともに、「^{あめこううちいき}黒い雨降雨地域」を^{かくだい}拡大するよう強く求めます。

本日、私たちは思いを新たに、^{げんばくぎせいしゃ}原爆犠牲者の^{みたま}御霊に^{ちゆうしん}衷心より^{あいとう}哀悼の^{まこと}誠を^{ささ}捧げ、^{ひばくち}被爆地長崎、そして世界の^{はいぜつ}人々と共に、核兵器^{こうきゆう}廃絶と世界^{じつげん}恒久^{じつげん}平和の実現に向けて力を^つ尽くすことを^{ちか}誓います。

平成30年(2018年)8月6日

広島市長 松井 一實

3 (広島) こども代表「平和への^{ちか}誓い」

人間は、美しいものをつくることができます。

人々を助け、笑顔にすることができます。

しかし、^{おそ}恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。

昭和20年(1945年)8月6日 午前8時15分。

原子爆弾の投下によって、街は焼け、たくさんの命が^{うば}奪われました。

「助けて。」と、^な泣き^{さけ}叫びながら^{たお}倒れている子ども。

「うちの息子はどこ。」と、^{さが}捜し^{つづ}続けるお父さんやお母さん。

「骨をもいでください。」と^{ほね}頼む人は、^{たの}皮膚が^{ひふ}垂れ下がり、^{むね}胸の肉が^{すがた}無い姿でした。

広島は、赤と黒だけの世界になったのです。

73年が^た経ち、私たちに残されたのは、

血がべっとりついた少女のワンピース、^{かべ}焼けた壁に記された伝言。

そして今も^{いこつ}なお、^{はか}遺骨の無いお墓の前で静かに手を合わせる人。

広島に残る^{いひん}遺品に^よ思いを寄せ、今でも^{かたむ}苦しみ続ける人々の話に耳を傾け、

今、私たちは、強く平和を願います。

平和とは、自然に笑顔になれること。

平和とは、人も自分も幸せであること。

平和とは、^{ゆめ}夢や希望をもてる未来があること。

苦しみや^{にく}憎しみを^の乗り越え、^{けんめい}平和な未来をつくろうと懸命に生きてきた広島の人々。

その平和への思いをつないでいく私たち。

平和をつくることは、^{むづか}難しいことではありません。

私たちは無力ではないのです。

平和への思いを^お折り鶴に^{づる}込めて、世界の人々へ^{とど}届けます。

73年前の事実を、^{ひばくしゃ}被爆者の思いを、

私たちが^{でんしょうしゃ}学んで心に感じたことを、伝える^{でんしょうしゃ}伝承者になります。

平成30年(2018年)8月6日

こども代表 広島市立牛田小学校

6年 ^{しんかい}新開 ^{みおり}美織

広島市立五日市東小学校

6年 ^{よねひろ}米廣 ^{ゆうひ}優陽

4 ながさき せんげん 長崎平和宣言

73年前の今日、8月9日午前11時2分。真夏の空にさく裂した一発の原子爆弾により、長崎の街は無残な姿に変わり果てました。人も動物も草も木も、生きとし生けるものすべてが焼き尽くされ、廃墟と化した街にはおびただしい数の死体が散乱し、川には水を求めて力尽きたたくさんの死体が浮き沈みしながら河口にまで達しました。15万人が死傷し、なんとか生き延びた人々も心と体に深い傷を負い、今も放射線の後障害に苦しみ続けています。

原爆は、人間が人間らしく生きる尊厳を容赦なく奪い去る残酷な兵器なのです。

1946年、創設されたばかりの国際連合は、核兵器など大量破壊兵器の廃絶を国連総会決議第1号としました。同じ年に公布された日本国憲法は、平和主義を揺るぎない柱の一つに据えました。広島・長崎が体験した原爆の惨禍とそれをもたらした戦争を、二度と繰り返さないという強い決意を示し、その実現を未来に託したのです。

昨年、この決意を実現しようと訴え続けた国々と被爆者をはじめとする多くの人々の努力が実り、国連で核兵器禁止条約が採択されました。そして、条約の採択に大きな貢献をした核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）がノーベル平和賞を受賞しました。この二つの出来事は、地球上の多くの人々が、核兵器のない世界の実現を求め続けている証です。

しかし、第二次世界大戦終結から73年がたった今も、世界には14,450発の核弾頭が存在しています。しかも、核兵器は必要だと平然と主張し、核兵器を使って軍事力を強化しようとする動きが再び強まっていることに、被爆地は強い懸念を持っています。

核兵器を持つ国々と核の傘に依存している国々のリーダーに訴えます。国連総会決議第1号で核兵器の廃絶を目標とした決意を忘れないでください。そして50年前に核不拡散条約（NPT）で交わした「核軍縮に誠実に取り組む」という世界との約束を果たしてください。人類がもう一度被爆者を生む過ちを犯してしまう前に、核兵器に頼らない安全保障政策に転換することを強く求めます。

そして世界の皆さん、核兵器禁止条約が一日も早く発効するよう、自分の国の政府と国会に条約の署名と批准を求めてください。

日本政府は、核兵器禁止条約に署名しない立場をとっています。それに対して今、300を超える地方議会が条約の署名と批准を求める声を上げています。日本政府には、唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約に賛同し、世界を非核化に導く道義的

責任を果たすことを求めます。

今、朝鮮半島では非核化と平和に向けた新しい動きが生まれつつあります。南北首脳による「板門店宣言」や初めての米朝首脳会談を起点として、粘り強い外交によって、後戻りすることのない非核化が実現することを、被爆地は大きな期待を持って見守っています。日本政府には、この絶好の機会を生かし、日本と朝鮮半島全体を非核化する「北東アジア非核兵器地帯」の実現に向けた努力を求めます。

長崎の核兵器廃絶運動を長年牽引してきた二人の被爆者が、昨年、相次いで亡くなりました。その一人の土山秀夫さんは、核兵器に頼ろうとする国々のリーダーに対し、こう述べています。「あなた方が核兵器を所有し、またこれから保有しようとするのは、何の自慢にもならない。それどころか恥ずべき人道に対する犯罪の加担者となりかねないことを知るべきである」。もう一人の被爆者、谷口稜嘩さんはこう述べました。「核兵器と人類は共存できないのです。こんな苦しみは、もう私たちだけでたくさんです。人間が人間として生きていくためには、地球上に一発たりとも核兵器を残してはなりません」。

二人は、戦争や被爆の体験がない人たちが道を間違えてしまうことを強く心配していました。二人がいなくなった今、改めて「戦争をしない」という日本国憲法に込められた思いを次世代に引き継がなければならないと思います。

平和な世界の実現に向けて、私たち一人ひとりに出来ることはたくさんあります。被爆地を訪れ、核兵器の怖さと歴史を知ることはその一つです。自分のまちの戦争体験を聴くことも大切なことです。体験は共有できなくても、平和への思いは共有できます。

長崎で生まれた核兵器廃絶一万人署名活動は、高校生たちの発案で始まりました。若い世代の発想と行動力は新しい活動を生み出す力を持っています。

折り鶴を折って被爆地に送り続けている人もいます。文化や風習の異なる国の人たちと交流することで、相互理解を深めることも平和につながります。自分の好きな音楽やスポーツを通して平和への思いを表現することもできます。市民社会こそ平和を生む基盤です。「戦争の文化」ではなく「平和の文化」を、市民社会の力で世界中に広げていきましょう。

東日本大震災の原発事故から7年が経過した今も、放射線の影響は福島の皆さんを苦しめ続けています。長崎は、復興に向け努力されている福島の皆さんを引き続き応援していきます。

ひばくしゃ へいきんねんれい さい こ せいふ しょうがい
被爆者の平均年齢は82歳を超えました。日本政府には、今なお原爆の後障害に苦
ひばくしゃ えんご じゅうじつ ひばくしゃ にんてい ひばく
しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、今も被爆者と認定されていない「被爆
たいけんしゃ きゅうさい
体験者」の一日も早い救済を求めます。

な ついと う きさ
原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、核兵器の
こうきゅう じつげん みな つ つづ
ない世界と恒久平和の実現のため、世界の皆さんとともに力を尽くし続けることをこ
せんげん
こに宣言します。

2018年（平成30年）8月9日

長崎市長 田上 富久
たう え とみ ひさ

5 (長崎) 被爆者代表「平和への誓い」

1945年8月9日、13歳だった私は、爆心地から3.2キロ離れた自宅の2階で被爆しました。爆風で飛んできた大きなガラス戸の下敷きになりましたが、奇跡的に無傷で助かりました。

3日後の今ごろ、私は、家屋が跡形もなく消滅し、黒焦げの死体が散乱するこの丘の上を歩き回っていました。探し当てた父方の伯母の家屋跡には、黒焦げになった伯母たち家族の遺体が転がっていました。この時、丘の下の上野町では、3日間生きながらえた母方の伯母の遺体をトタン板に載せて焼いていました。焼き終えた人の形をとどめた遺骨を見たとき、優しくかった伯母の姿が目には浮かび、その場に泣き崩れました。原爆により身内5人の命が一挙に奪われました。この日一日、私が目撃した浦上地帯の地獄の惨状を私の脳裏から消し去ることはできません。

原爆は全く無差別に、短時的に、大量の人々の命を奪い、傷つけました。そして、生き延びた被爆者を死ぬまで苦しめ続けます。人間が人間に加える行為として絶対に許されない行為です。

全国に移り住んだ被爆者たちは、被爆後10年余り、誰からも顧みられることなく、原爆による病や死の恐怖、偏見と差別などに一人で耐え苦しみました。

ビキニ環礁での、1954年3月1日のアメリカの水爆実験による「死の灰」の被害に端を発し、全国に広がった原水爆禁止運動に励まされて、1956年8月、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が結成されました。

日本被団協に結集した被爆者は、「同じ苦しみを世界の誰にも味わわせてはならない」と原爆被害の残酷な真相を、国の内外に伝え、広げ、核兵器の速やかな廃絶を世界に訴え続けてきました。

2010年代に入り、国際政治の場において、核兵器の非人道的な被害に焦点が当てられるようになるなか、長年にわたる被爆者と原水爆禁止を願う市民社会のさまざまな活動、さらにICANの集中的なロビー活動などが実を結び、2017年7月、「核兵器禁止条約」が国連で採択されました。被爆者が目が黒いうちに見届けたいと願った核兵器廃絶への道筋が見えてきました。これほど嬉しいことはありません。

ところが、被爆者の苦しみと核兵器の非人道性を最もよく知っているはずの日本政府は、同盟国アメリカの意に従って「核兵器禁止条約」に署名も批准もしないと、昨年原爆の日総理自ら公言されました。極めて残念でなりません。

核兵器国とその同盟国は、信頼関係が醸成されない国が存在する限り、核抑止力が必要であると弁明します。核抑止力は核兵器を使用することが前提です。国家間の信頼関係は徹底した話し合いで築くべきです。

紛争解決のための戦力は持たないと定めた日本国憲法第9条の精神は、核時代の世界に呼びかける誇るべき規範です。

私は、多くの先人たちの働きを偲びつつ、速やかに「核兵器禁止条約」を発効させ、核兵器もない戦争もない世界の実現に力を尽くすことを心に刻み、私の平和への誓いといたします。

2018年（平成30年）8月9日

被爆者代表 田中 熙巳

平成30年度
親子ひろしま訪問団・中学生ながさき訪問団
訪問の記録

編集発行 秦野市市民部市民活動支援課
〒257-8501 秦野市桜町1-3-2
TEL 0463-82-5118

